

「祈りの家」

マタイによる福音書 21 章 12-16 節

イエスさまは、神殿の境内で「売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒され」て、こう言われました。「『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしている」と。イエスさまが言われた「わたしの家」とは主の神殿のことです。主の神殿は真実な祈りがなされる場、神の御心に聞き従う礼拝の場であればなりません。「ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしている」。そうイエスさまは厳しく言われます。主なる神さまへの礼拝、祈りがなされる場をあなたたちは「強盗の巣」にしているのです。

ここで言われている「強盗の巣」という言葉は、エレミヤ書 7:11 から引用されている言葉です。エレミヤは形だけの儀式、偽善の礼拝をしていたユダの人々のことを「強盗」と呼びました。強盗とは、自分のためだけに人から奪う人、つまり自分の欲望を満たすためだけに生きる生き方とも言えます。神さまをも、礼拝をも、自分の平安や安心のための手段にして、結局は、自分の思いを遂げるために、自分が好きなことをするために利用している、それで本当に礼拝がなされていると言えるのか、祈りの家と言えるのか、神さまの目から見たら、ここは強盗の巣窟ではないのか。エレミヤの言葉を用いてイエスさまは、私たちの礼拝を厳しく問われるのです。

けれども、ここに表されているイエスさまは、ただ厳しいだけの姿ではありません。イエスさまは境内で目の見えない人や足の不自由な人々を癒されました。旧約聖書には、体に障害がある人は主なる神さまの前に出て礼拝することができないということが書かれています。ですから、それまで彼らは、完全な形で礼拝を守ることはできなかったのです。その彼らをイエスさまが癒されたというのは、礼拝ができなかった者をできるようにして下さったということです。さらに、それを見た子供たちは「ダビデの子にホサナ」と、イエスさまを賛美しました。子供というのも当時の社会では数に入れられていない、そういう意味では人間扱いされていなかった者たちです。しかし、その子供たちがイエスさまを讃美している。つまり、そこには真実な礼拝が行われているのです。

けれども、その讃美の声を聞いて、祭司長、律法学者たちが腹を立てたということです。彼らは、人々が真実な礼拝をするために立てられた責任ある人たちです。しかし、その人たちが、子供たちの礼拝に腹を立てているのです。そのようにして彼らは、まことの礼拝を妨げる者となってしまっているのです。礼拝を司り、それを真実なものとしていくはずの者たちが礼拝を妨げる者となり、体の不自由な人や子供たちという礼拝から疎外されていた人々や数に入れられていない人たちが、真実な礼拝をしているということが起っているのです。

イエスさまは祭司長や律法学者たちの言葉に対してこう答えられました。「あなたたちこそ、『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉はまだ読んだことがないのか」と。このことは、子供たちに讃美の声を与えられたのは、神さまなのだ、ということです。彼らの讃美と礼拝は、主なる神さまが、その恵みの御心によって与えてくださったものです。取るに足りない、数に入れられない彼らが、ただ神さまの恵みによって礼拝へと導かれ、まことの礼拝を

ささげる者とされているのです。目の見えない人や足の不自由な人も同じです。本来、礼拝に加わることでできなかった人たちが、イエス・キリストによって癒され、恵みを与えられて、礼拝の群れに加えられたのです。イエス・キリストが来られたことによって、礼拝のできなかった者ができるようになった、強盗の巣窟のようであったところに真実の礼拝が始まったというのです。

私たちは、自分の力では神さまを礼拝することなど出来ない者です。神さまに対しても隣人に対しても、強盗のようなことをしてしまう者です。神さまの御前に出ることなど出来ない者です。けれども、その私たちを、イエス・キリストが、あの目の見えない人や足の不自由な人たちと同じように癒してくださったのです。私たちの罪を赦してくださり、神さまの御前に出て礼拝することができる者としてくださったのです。そして、あの子供たちと同じように、私たちの口にも、神さまを、主イエス・キリストをほめたたえる讃美の言葉を与えてくださったのです。この主イエス・キリストの恵みと憐れみによって、「ダビデの子にホサナ」と讃美することができるのです。真実な礼拝をささげることができるのです。